

『賈誼新書』譯註稿 (二) 過秦上 (2)

工藤 卓司

凡例については、拙稿『賈誼新書』譯註稿(一)(『東洋古典學研究』第四九集所載)参照。

「秦人開關(而)延敵、九國之師逡巡而不敢進。秦無亡矢遺鏃之費、而天下(諸侯)已困矣。於是從散約(敗)「解」、爭割地而賂秦。秦有餘力而制其(弊)「敵」、追亡逐北、伏(師)「尸」百萬、流血漂櫓。因利乘便、宰割天下、分裂山河、疆國請服、弱國入朝。

秦人は關を開きて而して敵を延げば、九國の師は逡巡して而して敢へて進まず。秦は亡矢遺鏃の費さへ無くして、而して天下の諸侯は已に困しめり。是に於いて從散じ約解け、争ひて地を割きて而して秦に賂ひす。秦は餘力有りて而して其の敵を制し、亡ぐるを追ひ北ぐるを逐ひて、伏する尸は百萬、流れし血は櫓をも漂はす。利に因り便に乗じて、天下を宰割し、山河を分裂すれば、疆國は服せんことを請ひ、弱國は入朝せんとす。

【現代語譯】

しかしこの時、秦の人々は關所の門を開いて敵を誘つたので、九國の軍隊はしり込みして敢えて進もうとはしなかった。秦は矢や鏃さえ浪費すること無く、天下の諸侯は已に困難に陥ることになった。ここで合従の約定は崩れて、諸侯は争つて領地を割讓して秦に賄賂を贈つた。秦は餘力有つてそうした連合軍の綻びを見逃さず、逃亡するのを追撃し、倒した屍は百萬を數え、流した血は大きな楯をも浮かべた。有利なことに便乗して、天下を割讓させて支配し、諸國の領土を分裂させたので、強國は降服を請い、弱國は入朝しようとした。

(1) 「關」、『史記』秦始皇本紀・何本・程本・朱本・盧本・王謨本・王耕心本は「關」、四庫全書本は「關」に作る。また、『史記』陳涉世家・『文選』・何本・程本・子彙本・朱本・四庫全書本・『賈長沙集』・王謨本・和刻本はこの下に「而」字有り。王耕心は「史記陳涉世家・文選、『關』下に『而』字有るも、盧本は文の」とく、『而』字無し)、秦始皇本紀・漢書も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校詁二)が、今、諸本に従つ

て「而」字を補う。

(2) 「國」、兩京遺編本は「國」に作る。

(3) 「逡巡」、子彙本・盧本・和刻本・王耕心本は「逡遁」に作り、盧文弼は「遁」と「巡」とは同じ。建本は尚ほ誤らざるも、潭本は則ち始皇本紀に從ひて訛りて、本と『逡巡遁逃』に作る。案するに、陳涉世家は但だ『遁逃』に作るのみ、亦た誤れり」と言う。『史記』秦始皇本紀・何本・兩京遺編本・『賈長沙集』は「逡巡遁逃」、陳涉世家・『文選』・『藝文類聚』は「遁逃」、『漢書』陳勝項籍傳は「遁巡」に作る。顏師古は「遁巡」は、疑ひ懼れて而して卻き退くを謂ふなり。『遁』の音は千旬の反なり。流俗の書本『巡』字誤りて『逃』に作り、讀者之に因りて而して遁逃の義と爲す。潘岳の西征賦に『逃遁以奔竄』とあり、斯れも亦た誤れり」と言う。『漢書』陳勝項籍傳注)。しかし、王耕心は「盧本は文のごとく、注して『遁と巡とは同じ』と曰ふ。愚按ずるに、盧說當たれり。『逡巡』を曰て『逡遁』と爲すは、乃ち漢文の通用の字なり。漢書平當傳の『逡遁有恥』、敍傳の『逡遁致仕』のごときは、皆な是れなり。史記陳涉世家及び文選は直だ『遁逃』と作るのみ、秦始皇本紀は又た『逡巡遁逃』と作るは、皆な誤れり。漢書の本文も又た『遁巡』に作るは、尤も謬れり。顏師古乃ち強いて解詁を爲せるは、殆ど夢囈に近し。今、原文に仍る」と言う。『賈子次詁』校詁一)。今、盧・王說に従う。

(4) 「遺」、兩京遺編本は「遺」に作る。

(5) 「諸侯」、四部叢刊本には無く、『漢書』陳勝項籍傳も同じ。『史記』陳涉世家は「諸侯」の二字無く、代わりに「固」字有り。『史記』秦始皇本紀は「天下」の下に「諸侯」、何本・程本は「諸侯」、兩京遺編本・四庫全書本は「諸侯」、『賈長沙集』・王謨本は「諸侯」の二字有り。王耕心は「史記陳涉世家は『而天下固已困矣』に作り、漢書は『而天下已困矣』に作るも、盧

本は文のごとく、秦始皇本紀・文選も同じ。是なり。愚按ずるに、『諸侯』の字無きは殊に謬れり。今、原文に仍る」と言う。『賈子次詁』校詁一)。今、「諸侯」の二字を補う。

(6) 「矣」、『羣書治要』・兩京遺編本・四庫全書本は「矣」に作る。

(7) 「從」、程本・子彙本・王謨本・和刻本は「縱」に作る。上文に既に「合從」・「約從」と有れば、「從」のままとする。

(8) 「解」、四部叢刊本はもと「敗」に作る。『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・和刻本は「解」、『文選』・何本は「解」、程本・兩京遺編本は「解」、子彙本は「解」、朱本・王謨本は「解」、『賈長沙集』・盧本・王耕心本は「解」に作る。王耕心は「史記陳涉世家・漢書、『解』は『敗』に作るも、盧本は文のごとく、『解』、秦始皇本紀・文選も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う。『賈子次詁』校詁一)。なお、『史記』太史公自序には「六國既に從親するも、而も張儀は能く其の説を明らかにして、復た諸侯を散解せしむ」と有る。今、「解」に改める。

(9) 「爭」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『文選』・程本・四庫全書本は「爭」に作る。

(10) 「略」、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』は「奉」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀、『略』は『奉』に作るも、盧本は文のごとく、『略』、陳涉世家・漢書・文選も皆な同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う。『賈子次詁』校詁一)。土地を割讓して秦に「略」という表現が、『左傳』や『戰國策』に散見する。從つて、今、原文に依る。

(11) 「敝」、四部叢刊本はもと「弊」に作り、『漢書』陳勝項籍傳・程本・子彙本・朱本・四庫全書本・王謨本・和刻本も同じ。しかし、『史記』陳涉世家・『文選』は「弊」に作る。また、『史記』秦始皇本紀・何本・兩京遺

編本・『賈長沙集』・王耕心本は「敵」に作り、王耕心は「盧本、『敵』は『弊』」に作り、史記陳涉世家・漢書・文選も同じきも、秦始皇本紀は文のごとし（『敵』）。愚按ずるに、『敵』は乃ち正文なれば、是なり。困敵も亦た引伸の義にして、『弊』に作るは、後世増益の字なり。今、改正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。今、改める。

(12) 「尸」、四部叢刊本は「師」に作るが、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・子彙本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「尸」、兩京遺編本・朱本・四庫全書本は「屍」に作る。祁玉章は『師』に作るは、聲の誤りなり」と言う（『賈子新書校釋』）。『莊子』則陽・『文子』上禮・『戰國策』魏策に同様の例が有り、『賈誼新書』耳痺にも「尸を伏すること數十萬」と有る。今、「尸」に改める。

(13) 「櫓」、『史記』秦始皇本紀・『漢書』陳勝項籍傳・『賈長沙集』は「鹵」、盧本は「櫓」に作る。王耕心は「盧本、『櫓』は『櫓』に作る。史記秦始皇本紀・漢書は皆な『鹵』に作り、陳涉世家・文選は文のごとし（『櫓』）。愚按ずるに、説文に『櫓は、大盾なり』とあれば、『櫓』は重文たりて、『鹵』は通假に屬せば、『櫓』に作るこそ是なり。今、改正す。俗は櫓の本義に味く、惟だ目て櫓櫓の字と爲すのみ、非なり」と言う（『賈子次詁』校詁一）。今、王説に従う。なお、『羣書治要』は「逃亡逐北伏尸百萬流血漂櫓」の十字無し。

(14) 「乘」、『文選』・『羣書治要』・四部叢刊本・何本・子彙本・兩京遺編本・朱本・盧本・王謨本・和刻本は「乘」に作る。

(15) 「割」、何孟春は「に『制』に作る」と言い、子彙本・和刻本は「制」に作る。「宰制」は『賈誼新書』親疏危亂にも見えるが、統轄支配の意。ここでは下文に「分裂山河」とも有るように、分割に力點が置かれているよう

に思える。従つて、「割」としておく。

(16) 「山河」、『史記』秦始皇本紀・『文選』・『羣書治要』・何本・『賈長沙集』は「河山」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀・文選、『山河』は『河山』に作るも、盧本は文のごとく（『山河』）、陳涉世家・漢書も同じ。愚按ずるに、山河には陰陽の判有り。直だ『河山』に作るは、非なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。『史記』高祖本紀には「秦は、形勝の國にして、河山の險を帯び、千里を懸隔す」と有り、商君列傳にも「秦は河山の固に據り、東に郷ひて以て諸侯を制さば、此れ帝王の業なり」と有る。天官書にも「秦の三晉・燕・代を并吞するに及びて、河山より以南の者中國とす」と有るが、張守節は「河は、黄河なり。山は、華山なり」と註している（『史記正義』）。過秦下「被山帶河」の「山」・「河」はそれぞれ華山と黄河であるが、ここでは國土の意味であるから「山河」のままとする。

(17) 「疆」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『文選』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「疆」、『漢書』陳勝項籍傳・『羣書治要』は「強」に作る。「疆」、強」は古通ず。

(18) 「國」、兩京遺編本は「國」に作る。

(19) 「服」、『文選』・何本・程本・子彙本・盧本・王謨本・和刻本は「伏」に作り、盧文昭は「史記、『伏』は『服』に作る」と言う。王耕心は「盧本、『服』は『伏』に作りて、文選も同じきも、史記・漢書は文のごとし。是なり。今、改正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

(20) 「國」、兩京遺編本は「國」に作る。

(21) 『藝文類聚』帝王部一（總載帝王）所引の過秦論では「於是從散約解く弱國入朝」無し。

【延敵】本文を出典として「迎え撃つ」意とするものが多い。しかし、『史記』秦始皇本紀が引く「過秦論」には、「且つ天下嘗て心を同じくし力を并せて而して秦を攻めたり。此の世に當たり、賢智並び列なり、良將其の師を行ひ、賢相其の謀を通ず。然れども阻險に困しみて而して進む能はざれば、秦は乃ち戰に延き入れんとして而して之が爲に關を開きしも、百萬の徒は逃北して而して遂に壞る。豈に勇力智慧足らざらんや。形利あらず、勢便ならざればなり」と有る。「延」は引き入れるの意。吳雲・李春臺は「敵を誘うこと」と言う（『賈誼集校注』）。九國の軍が什倍の地・百萬の衆で攻めてきたのに對して、秦は「關を開いて敵を引き入れる」という策を用いた、とするのだろう。

【九國】司馬貞は『九國』とは、六國の外に、更に宋・衛・中山有るを謂ふなり」と言い（『史記索隱』、陳涉世家）、李善も『九國』は、齊・楚・韓・魏・燕・趙・宋・衛・中山を謂ふなり」と言う（『文選』注）。

【逡巡】顔師古は「此に言へらく、九國の地は廣く兵は強く、相ひ率いて西嚮し、形勝の地を仰ぎ、函谷の關に近づきて、秦室を攻めんと欲すとも、秦の人は其の險固なるを待みて、敵を懼るるの心無く、距り閉づるを加へず、關を開きて而して待つ。然れども九國は畏慚して、自ら度りて功無きも、疑を持ちて進まず、坐して敗散を致すのみ（後略）」と言う（『匡謬正俗』卷五、「逡巡」）。「逡巡」には「卻き退く」「卻き行く」や「從容」の意が有るが、ここではためらう、しりごみするの意。王洲明・徐超は「迷つて進まない」と言う（『賈誼集校注』）。

誼集校注』）。

【鏃】やじり。顔師古は『鏃』は、矢鋒なり、音は子木の反なり」と言う（『漢書』陳勝項籍傳注）。李善は、李巡『爾雅』注に『鏃』は、金を以て箭鏃を爲すなり」と言うを引く（『文選』注）。

【伏尸】戦死者の遺體が累々として見られる様子。中井積徳は『伏尸百萬』は、史傳に絶えて見る所無し」と言う（『史記雕題』）。

【亡、北】逃亡者、敗走者。

【漂櫓】顔師古は『漂』は、浮なり。『鹵』は、盾なり。其の血以て盾を浮はすべしとは、人を殺すことの多きを言ふ。漂は音は匹遙の反なり」と言う。裴駟は、徐廣が『鹵』は、楯なり」と言うのを引き（『史記集解』、秦始皇本紀）、司馬貞もまた、『說文解字』に「櫓は、大盾なり」と言うのを引く（『史記索隱』、陳涉世家）。李善は「『櫓』音は魯なり。韋昭曰く、『大楯を櫓と曰ふ』」と言う（『文選』注）。

夥しい流血のために、大きな楯でさえもその上に浮くほどだった、ということ。中井積徳は「是の役未だ詳らかならず。蓋し昭襄王十一年に在りしならん。史記に据れば、是の役の敗るるは秦に在り、地を割くも亦た秦なれば、此れと相ひ反す。恐らくは此れ事實を失ひしならん」と言う（『史記雕題』）。またこれとは別に、『賈誼新書』中には益壤篇に「故に黃帝は、炎帝の兄なるに、炎帝に道無くんば、黃帝之を涿鹿の野に伐ちて、血は流れて杵を漂はし、炎帝を誅して而して其の地を兼はせ、天下は乃ち治まれり」、制不定篇にも「炎帝とは、黃帝の同父母弟なり、各の天下の半ばを有つ。黃帝は道を行へるも、而も炎帝は聽かず。故に涿鹿の野に戦ひて、血は流れて杵を漂はす」と有る。これは『尚書』周書の武成に「血流漂杵」と有る

るに本づくものだろう。孔傳は「血流れて舂杵をも漂はず、甚だしきの言なり」と言い、孔疏は「易繫辭傳」の「木を斷つを杵と爲し、地を掘るを臼と爲す」を引いて、「是れ杵を臼器と爲すなり」と述べる。つまり「杵」は木製の臼であるから、やはり「漂櫓」と同じく、流血の甚だしいことを表現したものである。

【因利乘便】有利な情勢に乗じて。

【宰割天下、分裂山河】李爾鋼は「各國の土地を分裂させて占據し、その領域を分裂させる」こととする(『新書全譯』)。

「**施**及**孝文王**・**莊襄王**、**享國**(之)日淺、**國家無事**。及至(始**皇**)**秦**王、**奮六世之餘烈**、**振長策而御**(萬)「**宇**」内、**吞二周而亡諸侯**、**履至尊而制六合**、**執敵**(朴)「**扑**」而**鞭笞天下**、**威振四海**。**南取北**(越)「**粵**」之地、**以爲桂林**・**象郡**、**百**(越)「**粵**」之君、**俛首**係頸、**委命下吏**。**使蒙恬**北築長城而守藩籬、**却匈奴**七百餘里、**胡人不敢南下而牧馬**、**士不敢彎弓而報怨**。

施きて孝文王・莊襄王に及ぶに、國を享ふこと日淺く、國家は事無し。及びて秦王に至れば、六世の餘烈を奮ひて、長策を振ひて而して宇内を御し、二周を呑みて而して諸侯を亡ぼし、至尊を履みて而して六合を制し、敵扑を執りて而して天下を鞭笞し、威は四海に振ふ。南のかた北粵の地を取りて、以て桂林・象郡と爲せば、百粵の君は、首を俛れ頸に係けて、命を下吏に委ぬ。乃ち蒙恬をして北のかた長城を築きて而して藩籬を守らしめ、匈奴を却くること七百餘里、胡人は敢へて南に下りて而して馬を牧せず、

士は敢へて弓を彎きて而して怨に報いず。

【現代語譯】

續いて孝文王・莊襄王の時代となったが、在位期間が短かったので、國家は特段何も無かった。ところが秦王(始皇帝)の時代となると、孝公に始まる六世の餘烈を發揮して、馬を打って走らせるように長い鞭を振るって天下を治め、二周を併呑して諸侯も滅し、皇帝の位に登って天地四方を制壓し、笞を手持って天下に鞭打つ様に、その威勢は四海に盛んであった。南方は粵の北部の土地を奪って、桂林郡・象郡を設置すると、粵の君主達はこぞって、首を垂れ頸に繩をかけて、その命を下吏に委ねた。そこで、蒙恬に北方に長城を築いて守らせ、匈奴を北方へと七百餘里も退かせれば、胡人は敢えて南下して馬の放牧をしなくなり、匈奴の戦士たちは敢えて秦に對して弓を引いて怨みを晴らそうとはしなくなつた。

(1) 「施」、『史記』秦始皇本紀・『賈長沙集』は「延」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀、『施』は『延』に作る。盧本は文のごとく、陳涉世家・漢書・文選も同じ。愚按ずるに、『施』・『延』は義同じなるも、而も『施』文尤も古し。蓋し賈子は自ら『施』に作りしならん。今、原文に仍り、難易の易に讀む」と言う(『賈子次詁』校詁一)。なお、『藝文類聚』帝王部一(總載帝王)は「施及孝文王莊襄王享國日淺國家無事」を缺く。

(2) 「王」、『漢書』陳勝項籍傳は無し。

(3) 「國」、兩京遺編本は「國」に作る。

(4) 四部叢刊本では「之」字有り。盧文弨は「譚本は『享國』の下に『之』字有りて、陳涉世家と合ふ」と言う。『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・兩京遺編本・四庫全書本にも「之」字が有る。王耕心は「史記陳涉世家・漢書・文選、『國』の下に『之』字有り。盧本は文のごとく『之』字無し」、秦始皇本紀も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校註一)。今、削る。

(5) 「國」、兩京遺編本は「國」に作る。

(6) 「無」、『漢書』陳勝項籍傳は「亡」に作る。なお、『羣書治要』では「施及孝文王莊襄王享國日淺國家無事」無し。

(7) 「秦王」、四部叢刊本はもと「始皇」に作り、『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・子龔本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本も同じ。『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・王耕心本は「秦王」、『藝文類聚』は「秦始皇」に作る。王耕心は「盧本、『秦王』は『始皇』に作り、史記陳涉世家・漢書・文選も同じ。惟だ秦始皇本紀のみ文のごとし。愚按ずるに、盧及び諸家の『始皇』に作りしは、非にして誤りなり。中・下篇皆な『秦王』に作るを顧みれば、此に獨り『始皇』に作るは、殆ど義例の互しく有るべき所に非ず。桐城の姚氏曰く、『篇中の「秦王」、史記は本と此のごときも、漢書は皆な「始皇」に作る。竊按ずるに、陳政事疏も亦た始皇を稱へて「秦王」と爲せば、誼は暴秦を惡みて、其の論を稱せざるが似し」と。姚説既に精しく、復た證するに始皇本紀を以てすれば、則ち此の文決して當に『始皇』に作るべからざること、明らかなり。今、改正すること文のごとし。但だ義例を折衷するのみならず、亦た賈子の原文を存する所目なり。下文の『秦王』均しく此れに倣へ」と言う(『賈子次詁』校註一)。確かに過秦下篇はいずれも「秦王」に作るから、

上・下を一連の文章と見るならば、「秦王」が正しいか。今、過秦論の中で統一を圖るため、「秦王」に改める。『賈誼新書』淮難にも「秦王政」と有る。しかし、數寧篇には「秦始皇帝」の用例が有り、さらに秦始皇本紀における過秦論の順序や上篇のみが後世しばしば引用されたことに鑑みると、上・中・下がそれぞれ獨立した文章だった可能性も有り、一概に全てを統一してよいのかという疑問も残る。

(8) 「舊」、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』は「續」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀、『舊』は『續』に作る。盧本は文のごとく、陳涉世家・漢書・文選も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校註一)。唐の徐堅(？く七二九)等『初學記』卷五所引の過秦論は「秦王續六代之餘烈」と作り、劉師培はこれを引く(『賈子新書輯補』卷上)が、同卷二四では「始皇奮六代之餘烈」に作っている。「續」または「續」の場合は、「六代之餘烈を續(續)ぎて」となるが、今は「舊」としておく。

(9) 「御」、『漢書』陳勝項籍傳は「馭」に作る。王耕心は「漢書、『御』は『馭』に作る。盧本は文のごとく、史記・文選も同じ。愚按ずるに、『御』・『馭』は古通用するも、而も車馬の別有り。『御』字は當に車を以て言ふべく、馬を以て言ふを得ざれば、『御』に作る、是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校註一)。

(10) 「宇」、四部叢刊本はもと「寓」に作り、四庫全書本も同じ。しかし、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『羣書治要』・何本・程本・子龔本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「宇」に作る。上文に「宇内」と有るのに依つて、今、改める。

(11) 「周」、朱本は「州」に訛る。

(12) 「侯」、何本・程本・朱本は「侯」、兩京遺編本・四庫全書本は「侯」、

『賈長沙集』・王謨本は「疾」に作る。

(13) 「履」、何本・程本・兩京遺編本・王謨本は「履」に作る。

(14) 「敲扑」、四部叢刊本はもと「敲朴」に作り、『史記』陳涉世家・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・王謨本・和刻本も同じ。盧本は「搞朴」に作り、盧文弼は「本と皆な『敲朴』に作る。案ずるに、小司馬は『賈の本論は『搞朴』に作る』と云へば、今、之に従ふ」と言う。

『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『藝文類聚』・王耕心本は「敲扑」に作る。また、何孟春は「史記は『樞朴』に作る」と言う。『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』は「樞拊」に作り、徐廣は「拊」は、拍なり、音は府なり。一に「搞朴」に作る」と言う(『史記集解』)。王耕心は「盧本は『搞朴』に作るも、史記秦始皇本紀は『樞拊』に作り、陳涉世家は『敲朴』に作り、漢書・文選は文のごとし(『敲扑』)。愚按ずるに、『敲』は説文の正字たり、『搞』は乃ち後出の文なり。『拊』は尚書(舜典)の『教刑』の正名たりて、其の文は手に従ふ。木に従ふの字は木の皮と訓み、教刑と渉る無ければ、『敲拊』に作る、是なり。今、改正す」と言う(『賈子次詁』校詁一)。今、「朴」は「拊」に改める。

(15) 「而」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『羣書治要』・何本・程本・子彙本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本は「以」、王耕心本は「巨」に作る。祁玉章は「而」は他本は皆な『以』に作り、義に於いて同じと雖も、然れども此の文と上文の『振長策而御宇内』・『吞二周而亡諸侯』・『履至尊而制六合』三句と平列なれば、則ち亦た當に『執敲朴而鞭笞天下』に作るべく、さすれば句法は方に一律なるべし」と言う(『賈子新書校釋』)。今、祁説に従う。

(16) 「振」、『漢書』陳勝項籍傳・王耕心本は「震」に作る。王耕心は「盧本、『震』は『振』に作り、史記・文選も同じ。漢書は文のごとし(『震』)」。愚按ずるに、『震』は聲(おそれる)字にして、雨に従ふ。『振』は救(すくう)字にして手に従ふ。二文の義正しく相ひ反し、通假に當たらざらば、盧及び諸本多く『振』に作るは殊に謬れり。『震』に作る、是なり。今、改正す。

下文も此れに倣ふ」と言う(『賈子次詁』校詁一)。しかし、『史記』刺客列傳には「燕王誠に大王の威に振怖す」と有り、また、『賈誼新書』時變にも「威海内に振ふ」と有る。「振」・「震」は通假。

(17) 「北粵」、盧文弼は「譚本は『百越』に作る。下同じ」と言う。四部叢刊本はもと「北越」に作り、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『文選』・『羣書治要』・『藝文類聚』・兩京遺編本・『賈長沙集』・四庫全書本は「百越」、『漢書』陳勝項籍傳・何本・程本・子彙本・朱本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「百粵」に作る。王耕心は「史記・文選、『粵』は『越』に作る。盧本は文のごとく、漢書も同じ。愚按ずるに、二文は地を異にして、通假に當たらざれば、『粵』に作る、是なり。今、原文に仍り、下も此れに倣ふ」と言う(『賈子次詁』校詁一)。祁玉章は「北」は當に『百』に作るべし、聲の誤りなり。下文に『百越の君』と云ふ、是なり。『百越』は、子彙・盧本並びに『百粵』に作る。『越』『粵』古へ通ず」と言う(『賈子新書校釋』)。しかし、ここでは粵の北部の意ではなからうか。つまり、粵北を郡としたことで、さらに南の諸粵の君主も來降したと言いたいのだろう。

(18) 「以」、王耕心本は「巨」に作る。

(19) 「百粵」、四部叢刊本はもと「百越」に作り、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『文選』・『羣書治要』・『藝文類聚』・兩京遺編本・『賈長沙集』・四庫全書本も同じ。今、王耕心(註17参照)に依って「越」を「粵」に改め

る。

(20) 「俛」、『漢書』陳勝項籍傳・王耕心本は「頰」に作る。王耕心は「盧本、『頰』は『俛』に作り、史記秦始皇本紀・文選も同じ。漢書は文のごとし。(中略) 愚按ずるに、『頰』は正文、『俛』・『俯』は皆な後出の重文なれば、『頰』(中略)に作る、是なり。今、改正す」と言う(『賈子次詁』校註一)。「頰」も、俯くの意。しかし、『史記』等は皆な「俛」に作るので、原文に依る。

(21) 「係」、王耕心本は「繫」に作る。王耕心は「『繫』は盧は『係』に作り、諸家多く同じ。惟だ史記陳涉世家は文のごとし。(中略)『繫』は正文、『係』も亦た重文なれば、(中略)『繫』に作る、是なり。今、改正す」と言う(『賈子次詁』校註一)。王耕心が見た『史記』陳涉世家では「繫」に作っていたようだが、中華書局校點本『史記』では「係」となっている。段玉裁(一七三五～一八一五)は「按ずるに俗に繫に通用す」と言う(『說文解字注』)。今、原文に依る。

(22) 王耕心は「漢書、『乃』は『迺』に作る。盧本は文のごとく、史記・文選も同じ。愚按ずるに、『乃』は正文、『迺』は重文なれば、今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校註一)。中華書局校點本『漢書』は「乃」に作っている。なお、『羣書治要』は「以爲桂林象郡乃使蒙恬」無し。

(23) 「蒙」、『羣書治要』・『賈長沙集』・王謨本は「蒙」、程本・兩京遺編本・朱本は「蒙」に作る。

(24) 「藩」、『文選』は「蕃」に作る。王耕心は「文選、『藩』は『蕃』に作る。盧本は文のごとく、諸家も同じ。愚按ずるに、『藩』は正文、『蕃』は通假なれば、『藩』に作る、是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校註一)。「賈誼新書」中では「蕃」は繁多の意、「藩」は藩籬の意で用いら

れているので、「藩」としておく。

(25) 「却」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・王耕心本は「卻」に作る。なお、『羣書治要』は「而守藩籬却匈奴七百餘里」無し。

(26) 『史記』陳涉世家は「士」の下に「亦」字有り。王耕心は「史記陳涉世家は『士』の下に『亦』字有り。盧本は文のごとく、諸家も同じ。愚按ずるに、『亦』有るは衍なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校註一)。

(27) 「彎弓」、盧文昭は「陳涉世家は『貫弓』に作る。小司馬は『貫』は、音は烏還の反なり」と云ふ。又た字のごとく、上弦を謂ふなり」と言う。

「彎」、『史記』陳涉世家は「貫」、程本・子彙本・王謨本は「彎」に作る。司馬貞は「貫」は、音は烏還の反、又た字のごとし。『貫』は上弦を謂ふなり(『史記索隱』、陳涉世家)、「貫は弓を滿ち張るを謂ふ」と言う(同、伍子胥列傳)。王耕心は「史記陳涉世家、『彎』は『貫』に作る。盧本は文のごとく、諸家も同じ。愚按ずるに、『彎』は正文、『貫』は通假なれば、『彎』に作る、是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校註一)。「史記」伍子胥列傳に「伍胥貫弓執矢嚮使者」と有り、同じ場面を楚世家では「伍胥彎弓屬矢、

出見使者」と言う。「貫」・「彎」は同じ、『韓詩外傳』卷六でも「彎弓而射之」と有るので、今、原文のままとする。「弓」、程本・王謨本は「弓」に作る。

(28) 「怨」、子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・王謨本は「怨」に作る。なお、『藝文類聚』帝王部一(總載帝王)所引の過秦論では「於是廢先王之道以弱天下之民」を缺く。

【延】顔師古は「施」は、延なり。(中略)施は音は弋岐の反なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。及ぶの意。

【孝文王】顔師古は「孝文王は、昭襄王の子なり」と言う(『漢書』

陳勝項籍傳注)。孝文王(前三〇二〜前二五〇、前二五〇在位)、姓は嬴、名は柱。安國君。前二五一年に昭襄王が亡くなると、翌年に即位するも、その三日後に薨去。

【莊襄王】顏師古は「莊襄王は、孝文王の子、即ち始皇の父なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。莊襄王(前二八一〜前二四七、前二五〇〜前二四七在位)、姓は嬴、名は異人、後に子楚。趙に人質に出されていたが、呂不韋(？〜前二五五)に見出されて華陽夫人の養子となると、父孝文王の即位に伴って太子となり、父が薨去すると王位を継いだ、わずか三年で薨じている。魏の信陵君が燕・趙・韓・楚・魏の五國の兵を率いて攻めてきたが、河外に撃退している。

【享國】李善は「公羊傳に『桓公之享國也長』と曰ひ、何休は『享は、食なり』と曰ふ」と言う(『文選』注)。食は、養う、つまり「享國」は君主の在位期間を指す。饒東原は「國家を享有すること、つまり國君となること」と言う(『新譯新書讀本』)。中井積徳は「僅かに四年なるとも、頗る疆域を廣むれば、豈に事無しと謂ふべけんや」と言う(『史記雕題』)。また、王興國は「享國日淺、國家無事」について、孝文・莊襄の二王が禮治を行ったことに對する賈誼の評価を反映したものだとするが(『賈誼評傳』、頁七七)、論據に缺ける。

【秦王】秦王政、後の始皇帝(前二五九〜前二二一、前二四六〜前二二一在位)は、莊襄王の子。『史記』秦始皇本紀に「秦の始皇帝は、秦の莊襄王の子なり。莊襄王は秦の爲に趙に質子となり、呂不韋の姫を見て、悦びて而して之を取り、始皇を生む。秦の昭王四十八年正月に邯鄲に生まる。生まるるに及び、名づけて政と爲し、姓は趙氏なり。年十三歳にして、莊襄王死すれば、政代はりて立ちて秦王と

爲れり」と言う。秦王政九年(前二三八)に嫪毐の亂を鎮壓して相國呂不韋を罷免、李斯(？〜前二〇八)を重用して、二十六年(前二二二)に天下を統一、始皇帝と號し、様々な統一事業を行った。三十七年(前二二二)、東方巡幸中に崩御。近年、發見された北京大學藏西漢竹書の中には、始皇帝崩御の前後を物語る『趙正書』が含まれている(拙著「北京大學藏西漢竹書『趙正書』における「秦」叙述」、『中國研究集刊』第六三號、二〇一七年六月、一八八〜二二二頁参照)。

【六世】張晏は「孝公・惠文王・武王・昭王・孝文王・莊襄王なり」と言い(『史記集解』、秦始皇本紀)、李善も同文を引いている(『文選』注)。顏師古も「孝公・惠文王・武王・昭襄王・孝文王・莊襄王、凡て六君なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。

【餘烈】顏師古は「烈』は、業なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。遺業。

【振長策而御宇内】顏師古が「馬に乗るを以て喻と爲すなり。『策』は、以て馬を搦つ所なり」(『漢書』陳勝項籍傳注)と言うのは、『漢書』陳勝項籍傳に「御」を「馭」に作ることに由る。李善もまた、「馬を以て喻ふなり。説文に『振は、擧なり』と曰ふ」と言う(『文選』注)。王耕心は馬ではなく、車を操ることに喩えたとするが、ここでは一方に限定する必要は無かる。車馬を操ることに喩えたとしておく。

「長策」は、長鞭、轉じて良計、萬全の策。

【吞二周】『史記』周本紀に「(周王赧)五十九年、秦は韓の陽城・負黍を取れば、西周は恐れて、秦に倍き、諸侯と從を約して、天下の銳師を將いて伊闕を出て秦を攻め、秦をして陽城に通ずるを得ること無からしむ。秦の昭王は怒りて、將軍撓（なや）をして西周を攻めしむ。

西周の君は秦に犇りて、頓首して罪を受け、盡く其の邑三十六、口三萬を獻ず。秦は其の獻を受けて、其の君を周に歸す。周君・王赧卒し、周の民は遂に東へと亡ぐ。秦は九鼎寶器を取りて、而して西周公を憚狐に遷す。後七歳にして、秦の莊襄王は東周を滅す。東西の周は皆な秦に入り、周は既に祀らず」と有る。秦本紀の昭襄王五十一年にもほぼ同様の記事が有り、翌「五十二年、周の民は東に亡げ、其の器九鼎は秦に入る。周は初めて亡ぶ」、「莊襄王元年、(中略)

東周の君は諸侯と秦を謀りて、秦は相國呂不韋をして之を誅し、盡く其の國に入る。秦は其の祀を絶たずして、陽人の地を以て周君に賜ひ、其の祭祀を奉ず。(中略) 秦の界は大梁に至り、初めて三川郡を置く」と有る。周王赧五十九年は紀元前二五六年、昭襄王五十一年に當たり、東周が滅んだのは莊襄王元年、つまり紀元前二四九年に當たる。故に宋の呉枋(生卒年未詳)『宜齋野乘』が「則ち二周を吞むは、乃ち始皇の曾祖と父のときにして、始皇のときに非ざるなり」と言うように、二周を併呑したのは秦王政(始皇帝)ではない。

【亡諸侯】秦王政の時代になり、まずは十七年(前二三〇)に韓、二十二年(前二二五)に魏、二十四年(前二二三)に楚、二十五年(前二二二)に趙と燕、そして二十六年(前二二一)に齊を滅ぼしている。

【至尊】『荀子』正論に「天子とは、執位至尊にして、天下に敵するもの無し」と有る。ここでは皇帝の位。『漢書』には「朕眇身を以て至尊を承く」(武帝紀)、「朕至尊を承く」(宣帝紀)、「朕至尊の重を承く」(元帝紀)と有る。また、『賈誼新書』等齊篇に「諸侯王は乃ち至尊に埒し」と言う。

【六合】『淮南子』時則には「六合」について、「孟春と孟秋と合た

り、仲春と仲秋と合たり、季春と季秋と合たり、孟夏と孟冬と合たり、仲夏と仲冬と合たり、季夏と季冬と合たり」と有るが、ここでは時間的概念ではなく、例えば『莊子』齊物論に「六合の外は、聖人存するも而も論ぜず。六合の内は、聖人論ずるも而も議せず」と言うような空間的な概念である。成玄英疏に「六合」は、天地四方を謂ふ」と有り、『淮南子』原道注に「一に曰く、四方上下を六合と爲す」と有る。『新語』道基に「之を苞むに六合を以てす」と有り、さらに『賈誼新書』六術にも「天地に六合の事有り」と言っている。

【敲扑】臣瓚は「短きを敲と曰ひ、長きを朴と曰ふ」と言い、『史記集解』陳涉世家)、李善も「臣瓚は以爲へらく、『短きを敲と曰ひ、長きを朴と曰ふ』と。説文に『敲は、擊なり』と曰ふ。祐交の切なり」と言う(『文選』注)。鄧展は「敲」は、短き杖なり。『扑』は、捶なり」と言い、顔師古は「敲は音は苦交の反なり。扑は音は普木の反なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。李善は「扑」について、「浦木」の反だ、と言う(『文選』注)。山口察常(一八八二〜一九四八)は「何れも答刑に用いる杖なり、長きを搞といひ短きを朴といふ」と述べている(『國譯賈誼新書』)。祁玉章は「敲朴を執りて而して天下を鞭答すとは、蓋し言を木杖を執りて以て天下の人を毆撃するに借りて、猶ほ武力を以て天下を統治するを言ふがごとし」と言う(『賈子新書校釋』)。

【鞭答】本来はむちで打つことだが、ここでは所謂「詐力」(過秦下)によって支配すること。『史記』酈生陸賈列傳に「然れども漢王は巴蜀より起り、天下を鞭答して、諸侯を劫略して、遂に項羽を

誅して之を滅ぼせり」と有る。

【北粵・百粵】「百粵」は、現在の浙江省南部から福建・廣東・廣西チワン族自治區一帶にいた部族の總稱。韋昭は「越に百邑有り」と言う(『史記集解』、秦始皇本紀)。李善もまた、『漢書音義』に「百越は一種に非ず。今の百蠻と言ふがごときなり」を引き(『文選』注)、中井積徳も「百越とは、其の種類の多きを謂へるなり。實數に非ず」と言う(『史記雕題』)。「北粵」はその北部地域、あるいはそこに住んでいた部族。

【以爲桂林象郡】「桂林・象郡」は、現在の廣西チワン族自治區一帶に設置された郡の名。『史記』秦始皇本紀に「三十三年、諸ろの嘗て連亡せる人・贅婿・賈人を發して陸梁の地を略取せしめて、桂林・象郡・南海と爲して、適を以て遣戍せしむ」と有る。始皇三十三年は前二一四年。韋昭は「桂林」について「今の鬱林是れなり」と言い、「象郡」については「今の日南なり」と言う(『史記集解』所引)。

【俛】うつむく。鄧展は『頰』は音は俯なり」と言い、顔師古は「古の俯の字なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。

【係頸】「係」について、李善は「計なり」と言い(『文選』注)、何孟春も「音は、計なり」と言う(『訂註賈太傅新書』)。山口察常は「頸を係けて。自ら頸に繩をかけて罪を待つの意」とする(『國譯賈誼新書』)。吳雲・李春臺は「歸順の意を表すもの」と言う(『賈誼集校注』)。

【蒙恬】蒙恬(？前二二〇)は、秦の將軍。『史記』蒙恬列傳に「蒙恬は、其の先は齊の人なり。恬の祖父蒙驁、齊よりして秦の昭王に事へて、官は上卿に至りぬ。(中略)始皇七年、蒙驁卒す。驁の子を武と曰ひ、武の子を恬と曰ふ。恬は嘗て獄典文學を書す。(中略)蒙

恬の弟は毅なり」と有る。祖父・父共に秦の將であつたことから、蒙恬も秦始皇二十六年より將軍として軍功を積んでいく。蒙恬列傳にはまた、「秦已に天下を并せれば、乃ち蒙恬をして三十萬の衆を率いて北のかた戎狄を逐はしめて、河南を收む。長城を筑き、地形に因りて、用て險塞を制し、臨洮より、遼東に至るまで、延袤萬餘里なり。(中略)是の時、蒙恬の威匈奴に振ふ」と言う。

【築長城而守藩籬】顔師古は「言ふところは、長城を以て胡寇を扞蔽すること、人の家の藩籬有るがごとし、となり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。「長城」については、『新語』無爲に「秦始皇帝刑罰を設け、車裂の誅を爲ひて、以て姦邪を斂め、長城を戎境に築きて、以て胡越に備へ、大を征し小を呑み、威は天下に震ふ」、『淮南子』道應にも「秦の皇帝天下を得るも、守る能はざるを恐れて、邊戍を發し、長城を築き、關梁を修め、障塞を設け、傳車を具へ、邊吏を置く」と有る。無論、秦は六國が既に築いていた長城を整備し直したもののだが、漢初ではしばしば長城は秦が築いたものとされている。「藩籬」について、山口察常は「本義は竹垣などにて家の周圍に設くる垣根のこと、轉じて國の邊境の戍をいふ」と言う(『國譯賈誼新書』)。

【却】しりぞける。顔師古は「卻(却)』は、音は丘略の反なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。

【匈奴】古代中國北方の遊牧民族國家。『史記』匈奴列傳に「匈奴は、其の先祖は夏后氏の苗裔なり、淳維と曰ふ」と言う。それから「千有餘歲」の後、秦王政の頃の匈奴は頭曼單于に率いられていたが、秦に勝つことができず、さらに北に徙っている。

【彎弓】弓を引きしぼること。「士不敢彎弓而報怨」について、小尾郊一（一九一三〜二〇〇四）は「我が士は弓を引いて侵略の恨みを晴らそうとはしなかった」（『文選（文章編）六』）、野口定男は「諸國の士も弓をひいて怨みに報いようとはしなかった」と譯している（『史記』中、陳涉世家）。しかし、ここでの主語「士」は匈奴の士であろう。吉田賢抗（一九〇〇〜一九九五）は、この「士」について、「胡の武士。一説に、國內、六國の士というが、採らない。この一句は、前の百越に對して、北方の胡をいうからである」と述べている（『史記一（本紀）』）。ここでは、秦の勢力が匈奴をも退ける程であったことを強調したいわけだから、「士」は胡士のこととしなければならない。

「於是廢先王之道、焚百家之言、以愚黔首。墮名城、殺豪俊、收天下之兵、聚之咸陽、銷鋒鏑、鑄以爲金人十二、以弱天下之民。然後踐華爲城、因河爲（地）〔池〕、據億丈之（高）〔郭〕、臨不測之淵、以爲固。良將勁弩、（而）守要害之處、信臣精卒、陳利兵而誰何、天下已定。（始皇）〔秦王〕之心、自以爲關中之固、金城千里、子孫帝王萬世之業也。」

是に於いて先王の道を廢し、百家の言を焚きて、以て黔首を愚かにす。名城を墮ち、豪俊を殺し、天下の兵を收めて、之を咸陽に聚めて、鋒鏑を銷かし、鑄て以て金人十二を爲りて、以て天下の民を弱む。然る後に華に踐りて城を爲し、河に因りて池を爲し、億丈の郭に據り、不測の淵に臨みて以て固と爲す。良將勁弩は、要害の處を守り、信臣精卒は、利兵を陳ねて而して誰何す。天下

已に定まりたれば、秦王の心、自ら以爲へらく關中の固は、金城千里、子孫帝王萬世の業なり、と。

【現代語譯】

そこで、先王の道を廢し、百家の言を焼くことで、民衆を愚かにした。また、名城を破壊し、豪俊を殺し、天下の武器を回収して、咸陽に集めて、金屬部分を熔かして、金人十二體を鑄造することで、天下の民の力を弱めたのである。その後、華山の地形を利用して城を、河の流れに沿って堀を造營し、億丈の高さの高所に據り、測れない程深い淵を見下ろして守りとした。また良將強弩が要害を守り、信賴する臣下や精銳が鋭利な武器を並べて誰何した。こうして天下の形成は已に定まったので、秦王は心の中で、關中の守りは固く萬全、子孫帝王萬世の業績だ、と誇らしげに思った。

(1) 「廢」、何本・程本・兩京遺編本は「廢」に作る。

(2) 「焚」、『史記』陳涉世家・『文選』・何本・程本・子纂本・朱本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「燔」に作り、兩京遺編本は「楚」に訛る。

王耕心は「史記秦始皇本紀・漢書、『燔』は『焚』に作る。盧本は文のごとく『燔』、陳涉世家・文選も同じ。愚按ずるに、『燔』は説文の正字、『焚』は後出なれば、『燔』に作る、是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校話一）。また、伍被も「昔秦は聖人の道を絶ち、術士を殺し、詩書を燬き、禮義を棄て、詐力を尚び、刑罰に任じて、負海の粟を轉じて之を西河に致したり」と言う（『史記』淮南衡山列傳）。しかし、『史記』儒林列傳には「秦時焚書」、「及至秦焚書」と有る。今、原文に依る。

(3) 「以」、王耕心本は「巨」に作る。

(4) 「黔首」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・朱本・盧本・王耕心本は「黔首」に作り、『羣書治要』は「百姓」に作る。

(5) 「墮」、何孟春は『禮記』に同じ」と言う。子彙本は「墮」、『文選』・『羣書治要』・兩京遺編本は「墮」、四庫全書本は「墮」に作る。『禮記』月令の釋文に「墮は亦た墮に作る」と有る。

(6) 「俊」、兩京遺編本・四庫全書本は「傑」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀、『俊』は『傑』に作る。盧本は文のごとく(『俊』)、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校詁一)。今の『史記』は「俊」に作っている。過秦下にも「豪俊相ひ立つ」と有る。

(7) 「鋒」、何本・子彙本は「鋒」に作る。

(8) 「鑄」、『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・朱本・盧本・王謨本は「鑄」に作り、盧文昭は「潭本、『鑄』は『鑄』に作り、音義同じ。始皇本紀は『鑄鏃』に作る」と言う。四部叢刊本は「鑄」字の下に、「音は的なり。鋒鏃なり」と注している。徐廣は「一に『鑄』に作る」と言う(『史記集解』、陳涉世家)。子彙本・兩京遺編本・四庫全書本・和刻本・王耕心本も「鑄」に作るが、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・『賈長沙集』はこの字を「鑄」に作って下の「鑄」を「鏃」に作る。王耕心は「盧本、『鑄』は『鏃』に作り、史・漢・文選も同じ。潭本は『鑄』に作り、古本史記も同じ。愚按ずるに、『鑄』は乃ち正文、『鏃』は通假に屬せば、『鑄』に作る、是なり。今、改正す。此の句、諸家皆な盧本に同じなるも、惟だ史記秦始皇本紀のみ『銷鋒鑄鏃巨爲金人十二』に作る。文、本紀の正文及び此れと皆な合はず。僅かに數字を易ふるのみなるも、幾ど通ずべからざれば、決して賈子の原文に非ず。今、取らざる所なり」と言う(『賈子次詁』校詁

一)。

(9) 「以」、王耕心本は「巨」に作る。

(10) 「以」、王耕心本は「巨」に作る。

(11) 「天下」、『史記』秦始皇本紀は「黔首」、『羣書治要』は「黔首」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀、『天下』は「黔首」に作る。盧本は文のごとく(『天下』)、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校詁一)。「黔首」は百姓・庶民のことであるから、「之民」と續けるなら、意味が重複してしまふ。従つて、ここは「天下之民」が正しいだろう。

(12) 「踐」、何孟春は「一に『斬』に作る」と言う。『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』は「斬」に作り、徐廣は「『斬』は、一に『踐』に作る」と言う。司馬貞は「『斬』は、亦た『踐』に作るも、亦た賈の本論に出づ」と言う(『史記索隱』)。王耕心は「史記秦始皇本紀、『踐』は『斬』に作る。盧本は文のごとく(『踐』)、諸家も同じ。索隱に『賈子の本書は「踐」に作る』と曰へば、是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校詁一)。なお、『太平御覽』では、居處部二(城下)は「然後」を「秦」に作るが、兵部五一(拒守下)ではやはり「然後」に作っている。

(13) 「池」、四部叢刊本はもと「地」に訛り、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』は「津」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀、『池』は「津」に作る。盧本は文のごとく(『池』)、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う(『賈子次詁』校詁一)。「津」は「水渡(港)」、交通の要衝を意味するのだから、ここでは上文の「城」に對比するものでなくてはならない。『禮記』禮運に「城郭溝池以て固と爲す」と有る。今、諸本に依つて「池」に作る。即ち「水堀」。

(14) 「據億丈之郭、臨不測之淵」、四部叢刊本はもと「據億丈之高、臨不

測之淵」に作り、王耕心本も同じ。盧文昭は「史記は『據億丈之城、臨不測之谿』に作る。潭本も『淵』は亦た『谿』に作る」と言う。『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『文選』・『羣書治要』・『藝文類聚』・『太平御覽』兵部五一（拒守下）・何本・朱本・『賈長沙集』・王謨本は「據億丈之城、臨不測之谿」、『漢書』陳勝項籍傳は「據億丈之城、臨不測之川」、程本・子彙本・和刻本は「據億丈之城、臨不測之谿」、兩京遺編本は「據億丈之高、臨不測之谿」、四庫全書本は「據億丈之城、臨不測之淵」、盧本は「據億丈之高、臨百尺之淵」に作る。王耕心は「史・漢・文選、『高』は『城』に作る。盧本は文のごとし。愚按ずるに、『城』は上文に復せば、『高』に作る、是なり。今、原文に仍る」、盧本は『百尺之淵』に作るも、史記・文選は皆な『不測之谿』に作り、漢書、『淵』は『川』に作る。愚按ずるに、賈子の文は必ずしも『億丈』・『百尺』を以て對と爲さざれば、『不測』に作る、是なり。『淵』を以て『谿』と爲し、『川』と爲すは、乃ち唐の人の避諱して改むる所なれば、『淵』に作る、是なり。今、訂して文のごとくす」と言う（『賈子次詁』校詁一）。また、王念孫（一七四四〜一八三二）は『墨子』所染「高偃」について、『高』は當に『臺』と爲すべし。『臺』は即ち城郭の『郭』なるも、形『高』と相ひ近し、因りて譌りて『高』に爲る。（賈子過秦篇『據億丈之臺』は、今本、『臺』譌りて『高』に作る）」と云う（『讀書雜誌』、墨子弟一）。祁玉章もまた、『高』は當に『郭』に作るべし。『億丈之郭』と『不測之淵』は對文なるに、若し『高』に作れば、則ち『高』と『淵』と相ひ對せず。郭は、城郭なり」と言う（『賈子新書校釋』）。今、「據億丈之郭、臨不測之淵」に改める。

(15) 「以」、王耕心本は「巨」に作る。

(16) 「弩」、程本・子彙本・王謨本は「弩」に作る。

(17) 「而」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』

・『羣書治要』・程本・子彙本・朱本・『賈長沙集』・盧本・王耕心本は無し。盧文昭は「潭本は（『弩』）下に『而』字有り」と言う。何本・四庫全書本も「而」字有り。俞樾（一八二二〜一九〇七）は「吉府本は『守』の上に『而』字有り。疑ふらくは『勁弩』の上に一字を闕きしか。下句に『信臣精卒、陳利兵而誰何』と云へば、此の句の『良將』は『信臣精卒』と對たりて、『勁弩』は『利兵』と對たれば、必ず更に一字有りて、方に『陳』字と對たるなり。此の字偶ま闕け、後の人誤りて『良將勁弩』の四字を以て『信臣精卒』に對し、遂に『而』字謂ふこと無しと覺ゆれば、輒ち之を刪去す。吉府本に『而』字有れば、猶ほ其の迹を推し尋ぬべし。然れども闕く所の者は何なる字なるかは、據りて補ふべき無きなり」と言う（『諸子平議』、賈子一）。

(18) 「何」、『太平御覽』兵部五一（拒守下）は「奈何」に作る。

(19) 「已」、『史記』秦始皇本紀は「以」に作る。なお、『羣書治要』は「天下已定」の四字無し。

(20) 「秦王」、四部叢刊本はもと「始皇」に作り、『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本も同じ。『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・王耕心本は「秦王」に作る。今、上文の「始皇」と同様、ここも「秦王」に改める。『藝文類聚』帝王部一（總載帝王）所引の過秦論では下の「之心」二字無し。

(21) 「以」、王耕心本は「巨」に作る。

(22) 「關」、『文選』・程本・子彙本・兩京遺編本・和刻本は「關」、『羣書治要』は「關」、四庫全書本は「關」に作る。

(23) 「也」、『文選』は無し。王耕心は「文選は『也』字無し。盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校

詰二)。

【廢先王之道、焚百家之言、以愚黔首】『史記』秦始皇本紀に「李斯曰く、『(中略) 臣請ふらくは、史官は秦記に非ざれば皆な之を燒かん。博士の官の職つとる所に非ずして、天下に敢へて詩・書・百家の語を藏する者有らば、悉く守・尉に詣りて雜へて之を燒かん。敢へて詩・書を偶語する者有らば棄市とせん。古を以て今を非る者は族とせん。吏の見知して擧げざる者は與に罪を同じくせん。令下りて三十日燒かざらば、黥して城旦と爲さん。去らざる所の者は、醫藥・卜筮・種樹の書なり。若し法令を學ぶこと有らんと欲さば、吏を以て師と爲さんことを』と。制に曰く、『可し』』と有る。李斯列傳にも同様の記事が有り、「始皇は其の議を可しとして、詩書百家の語を收去して以て百姓を愚かにし、天下をして古を以て今を非る無からしむ。法度を明らかにし、律令を定むは、皆な始皇を以て起これり」と述べている。李斯の上疏は、始皇三十四年(前二三)。「黔首」は、「一般人民」の意(山口察常『國譯賈誼新書』)。始皇二十六年(前二二)に、「更めて民に名づけて『黔首』と曰ふ」と有る(『史記』秦始皇本紀)。李爾鋼は「黔は黒色、秦朝では平民百姓を黔首と稱した」と言う(『新書全譯』)。「賈誼新書」過秦下にも「王道を廢して而して私愛を立て、文書を焚きて而して刑法を酷にす」と有る。【墮名城】顏師古は「墮」は、毀なり、音は火規の反なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。應劭は「城を壞すは、復た阻みて以て己が害と爲るを恐る」と言う(『漢書』陳勝項籍傳・『文選』注所引)。

【兵】兵器(山口察常『國譯賈誼新書』)。

【咸陽】現在の陝西省咸陽市。秦の孝公十二年(前三五二)に櫟陽から遷都して以來、秦都として榮えた。

【鋒】武器の刃、鋭利な部分。顏師古は「鋒」は、戈戟の刃なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。

【鏃】「鏃」に同じ、鏃。如淳は「鏃」は音は鏃、箭鏃なり」と言い、顏師古は「鏃」と鏃は同じ、即ち箭鏃なり。如(淳)の音は是なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。李善もまた、如淳の「鏃」は、箭足なり、鄧展の「鏃」は、扞頭の鐵なり」と言うを引き、「鏃」は音は是なり。或ひは提と爲す」と述べている(『文選』注)。

【金人十二】銅製の人の像。司馬貞は「各の重さは千石、坐高は二丈、號して『翁仲』と曰へり」と言う(『史記索隱』陳涉世家)。顏師古は「所謂の公仲なる者なり。三輔黃圖に、『坐高は三丈なり』と云ふ。其の銘に『皇帝二十六年、初めて天下を兼はせ、諸侯を改めて郡縣と爲し、法律を一にし、度量を同じくす。大きな人、臨洮に來たり見はれ、其の長さは五丈、足跡は六尺なり』と曰ふ」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。「史記」秦始皇本紀に「天下の兵を收めて、之を咸陽に聚め、銷かして以て鐘鐻・金人十二を爲し、重さ各の千石、廷宮の中に置く」と有り、「漢書」五行志上之下にも關連記事が有る。「三輔舊事」に據れば、それぞれ重さは二十四萬斤で、漢代には長樂宮の門前に置かれていたと言う(『史記正義』所引「三輔舊事」)。その後、後漢末に董卓(？～一九二)がその中の十體を熔かして金錢に替え、残り二體は五胡十六國の時代に後趙の石虎(二九五～三四九)によつていったん鄴へと移されたが、その後、前秦の苻堅(三三七～三八五)が長安に戻して熔かしたと言う(『史記正義』所引「關中記」)。

『淮南子』汎論にも「秦の時、(中略)金人を鑄し」云々と有る。

【踐華】服虔は「華山を斷ちて城と爲す」と言う(『史記集解』、秦始皇本紀)。しかし、崔浩(三八一―四五〇)は「踐」は、登なり」と言う(『史記索隱』、秦始皇本紀)。顏師古は服説を引いた上で、晉灼の「踐」は、登なり」を引き、「晉説是なり」と言う(『漢書』陳勝項籍傳注)。「華」は、華山、陝西省華陰縣の渭河盆地の南に有り、五嶽の一。「踐」、瀧川龜太郎(一八六五―一九四六)は「猶ほ據のごときなり」と言う(『史記會注考證』、秦始皇本紀)。祁玉章も「踐」は疑ふらくは「藉」の段ならん。荀子王霸篇に『日欲司閒而相與投藉之』とあり、楊注に「藉は、踐なり」といふ。『踐』・「藉」は一音の轉、音訓なり。管子内業篇に『彼道自來可藉與謀』とあり、房注に「藉は、因なり」といふ。(中略)『踐華爲城』と「因河爲池」とは對文なれば、『踐』と「因」は對、『華』と「河」は對なり。『踐』、若し『登』、或ひは『斬』と訓ずれば、則ち『因』と相ひ對せず。華に踐りて城と爲すとは、乃ち華山に藉りて城と爲すと言ふなり」と言う(『賈子新書校釋』)。「論語」先進「不踐迹」孔注にも「踐」は、循なり」と有る。下文の「因河」と對照すれば、華山の地形を利用して、の意であろう。小尾郊一は、晉灼の「登」を足場と捉え、「踐華」を「華山を天然の城壁として利用する」の意に解している(『文選(文章編)六』。吳雲・李春臺が「踐」を「據る」と讀む(『賈誼集校注』)のも晉灼説に依るもの。

【河】黄河。

【池】護城河、水堀。『禮記』禮運に「城郭溝池以て固と爲す」と有る。

【誰何】如淳は「何」は猶ほ問ふがごときなり」と言う(『史記集解』、秦始皇本紀)。司馬貞は「崔浩曰く、『何』は或は「呵」と爲す」と。

漢舊儀に「宿衛の郎官は五夜を分けて誰呵し、夜行く者は誰かと呵む」とあり。何・呵は字同じ(『史記索隱』、秦始皇本紀)。「音は呵、亦た「何」字なり、猶ほ今の巡更して何誰と問ふがごとし」と言う(『史記索隱』、陳涉世家)。また、顏師古は「之に問ひて誰なるかと爲す、又た何の人なるかと云ふ、其の義一なり」(『漢書』陳勝項籍傳注)、李善は「誰何」は、之を問ふなり。漢書に「誰何卒」と有りて、如淳は「何は、何れの官なるかを謂ふなり。『廣雅』に「何は、問なり」と曰ふ」と言う(『文選』注)。中井積徳も「誰何」は、出入するを詰問するの辭にして、必ずしも夜とせず」と言い(『史記雕題』)、山口察常は「誰ぞと尤めることで、守の嚴重なること」と言う(『國譯賈誼新書』)。王洲明・徐超は「督察すること」と言う(『賈誼集校注』)。ただ、祁玉章は「誰何」は蓋し漢時流行の現代語にして、猶ほ之を置きて問はず、或ひは奈何ともする無きを言へるがごとし。(中略)按ずるに此の文の利き兵を陳ねて而して誰何すとは、猶ほ利き兵を陳ねて而して誰が能く奈何するやと言ふがごとし」と言う(『賈子新書校釋』)。一説としておく。

【金城】司馬貞は「金城」は、其の實ちて且つ堅きを言へるなり。韓子に『金城湯池有りと雖も』と曰ひ、漢書に張良も亦た「關中は所謂の金城千里、天府の國なり」と曰へり」と言う(『史記索隱』、秦始皇本紀)。

【子孫帝王萬世之業】『史記』秦始皇本紀に、始皇帝自ら「今より已來、諡法を除け。朕を始皇帝と爲す。後の世は計數を以てして、二

世三世として萬世に至り、之を無窮に傳へよ」と言い、李善はこれを引いている（『文選』注）。李爾鋼は「千秋萬世相傳して絶えることのない基業」と言う（『新書全譯』）。

（過秦上 未完）